

## 別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

## 主 論 文 の 要 旨

論文題目

タンザニアの中等学校におけるシティズンシップ教育—アフリカの共同体論に着目して—

氏 名

佃 瞳

## 論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、タンザニアの教育現場においてどのようなシティズンシップが形成されているのかをタンザニアの文脈に注意を払いながら描き出すことを目的とする。アフリカにおけるシティズンシップ教育に関する先行研究からは、アフリカの文脈を考慮したシティズンシップ理解の必要性が指摘できる。さらに、その文脈を固定的な「伝統」として認識するのではなく、日常的な活動や語りを参照しながら、その雑種性や混濁性、流動性に注意を払った解釈を行うことが重要であることも指摘できる。そこで、本論文では地域研究というアプローチおよび「アフリカの共同体論」という視角を採用し、それらの課題にとりくむこととする。

本論文において、「アフリカの共同体論」とは、政治学、経済学、文化人類学など様々な分野で行われているアフリカにおける共同体の特質に関わる議論の総体としている。それは、アフリカの人びとがさまざまな困難に直面する日々の生活のなかで重視する、共同性や互酬性にもとづく共同体での価値観や行動規範、さらに、それらの実践の背景に存在するとされる、ものごとを人と人との関係の中で全体的にとらえるという観念についての議論を含むものである。これらの議論には、農村部における互酬的なやりとりや、都市部において発生するインフォーマルな共同性、さらにそれらの実践を支えるアフリカの人々の情緒的で精神的な世界をも理解に含める、全体的で包括的な「認識論」などが挙げられる。

以上のような視角を用いて本論文が分析対象とするのは、タンザニア第一の都市、ダルエスサラームの公立中等学校での実践および教員の語りである。公民科目のほか、クラブ活動や生徒会などの課外活動の観察、関係者への聞き取り調査、および文献調査を行い、彼らが形成するシティズンシップ像を明らかにする。シティズンシップ教育を、特に「アフリカの共同体論」の視角から考察することで、学校という場で教員や生徒が

思い描き、実践を通して構築するシティズンシップ像を捉えると同時に、このアフリカの共同体論の視角が、周辺化されてきたアフリカの人々の営みや解釈、価値観や認識についての新たな理解を提供し得るか、その学問的な可能性を検討することが本論文の目的である。

本論文は、序章、終章のほか、第1章から第5章で構成される。以下、各章の概要を示す。

第1章ではタンザニアにおける近代学校教育がどのような状況の中で成立してきたのか、その中でシティズンシップ教育と捉えられる教育実践としてどのようなものが行われていたのか、その背景に着目しながらその成立の歴史を概観する。学校教育にはそれぞれの時代で求められる市民像が投影されており、タンザニアの場合、村落共同体、宗教組織、植民地政府、ニエレレ社会主義政党、国際機関など、その時々教育を提供する主要なアクターの想定する共同体のあり方が大きく関わってきたといえる。これらの考察を通して、教育が視野に入れる共同体がどのようなものであり、どのようなシティズンシップが構築されているのか、本論文でそれらを明らかにすることの意義を再度明確化した。

第2章および第3章ではシティズンシップを学ぶ主要な科目である公民科目について考察する。第2章では、公民授業で現在も主要な学習媒体となっている教科書の内容を分析し、そこで描かれるシティズンシップ像とそれらが教室内で想定するシティズンシップ教育像を明らかにする。教科書全体の傾向として、その内容は抽象的な説明に終始しており、学習目標をそのまま説明するような記述が見られるという課題が指摘できた。一方、そのなかでも具体的な説明を伴う箇所からは、特徴的な点として以下3点を明らかにした。シティズンシップが①個人や共同体の責任を重視するものであること②国家の分断を回避する寛容さという態度に重きが置かれること、そして③それらを教授する際に全体的で共感的な論理が働いていることである。以上の様な、個人主義の重視を掲げながら、共同体の連帯を強化する態度も同時に尊重しようという姿勢は一見すると相反するものである。それらが実際に教員や教育の場面でどのように使い分けられ、または共存しているのか、第3章ではこの問いも含めて公民科目担当教員の認識と授業実践を分析する。

第3章では公民科目教員への聞き取り調査および授業観察を通じて、教員がよきシティズンシップをどのように認識しているのか、さらに生徒が経験し、構築するシティズンシップがどのようなものであるのかを分析する。分析からは、自己責任と連帯、権威主義と平等主義、無批判と対話など、相反する価値観や行為が同じ教員の語りやひとつの授業の中で使い分けられ、一見相入れない態度が共存していることが明らかになった。学校や教室という

場が彼らの生活を支える共同体のひとつとしてとらえられ、彼等にとっての安全で快適な環境の維持、暮らしの維持のためにその場その場に合った関係性を重視した行動が選ばれる様子が明らかになった。新自由主義的な自己責任、試験及び知識重視の学習、権威主義的な環境の中で、自身の利益を最大化するために、また快適な状態を維持するために相対する価値の折衝・交渉するシティズンシップが語られ実践されていると考察した。

第4章および第5章ではノンフォーマルな学びの事例を分析対象とする。第4章では、中等学校における生徒会活動を分析する。生徒自治会 (Student Government) や生徒評議会 (Bazara, Student Council) とよばれるこれらの活動は、学校という場で日々起こる様々な問題に生徒自身が取り組み、学校環境の改善やその活動を通じた学びを得ることを目的とするものであり、シティズンシップを経験する場のひとつと捉えることができるためである。本章では生徒同士の協働や交渉などの民主的な実践を伴うこれらの活動について、教員と生徒からの聞き取り調査を行った。調査からは、権威主義的な学校環境と生徒による主体的な活動が困難な状況が広く存在していることが明らかになった。一方で、比較的活発な活動を行っているA校の事例からは、「助けてあげる」と「助けてもらえる」の間の微妙な権力関係のバランスの維持を行う、互酬性にもとづくやりとりや駆け引きが行われていること、さらにそれによって階層的な関係を対等な関係へと近づける実践が行われていることを指摘した。本章からは、共同体内部での権力関係に関わるシティズンシップのあり方が明らかになったと言える。

第5章では、アフリカの共同体論に着目するという本研究の目的から、生徒が学校内で自主的に設立した相互扶助クラブの事例を取り上げる。この事例は学校という空間の中でみられる貧困や障がいやを公共の課題として生徒自身が取り組む実践であり、シティズンシップを経験する場のひとつとして捉えることが可能である。C校で設立されたクラブ活動の観察及び参加者からの聞き取りからは、クラブの参加者が、議論をへて、既存の階層的な意思決定の構造や公的な機関との関わりを回避しながら、タンザニア社会で多くみられる相互扶助にもとづく集団を組織する様子が明らかになった。このクラブの立ち上げから縮小までの経緯を追うことで、相互扶助というイメージが多くを若者を惹きつけたこと、さらに参加者による討議の場が作り出され、それがあつた種の公共空間となり、彼らにとって価値あるものと認識されていたことが明らかになった。彼らのシティズンシップには相互扶助という行為が好意的なものとして含まれること、そして共同体維持のための公共空間の存在を重視する姿勢が確認できた。

以上の分析から、本論文ではタンザニアの学校教育におけるシティズンシ

ップについて以下の3点が明らかになった

- ① 学校という共同体の維持、そこでの居心地の良さの維持という目的のもと、個人主義と連帯、平等と卓越性、批判と無批判という、相対する価値の折衝・交渉が行われている。
- ② 共同体内部での微妙な権力関係維持のための互酬的なやりとりが重要な役割を有している。
- ③ 相互扶助というイメージが好意的なものとして認識されており、さらにそれらの維持のための公共空間（対話の場）が重要な意味を持っている。

一方、本論文を通して、彼らの形成するシティズンシップには以下のような課題が存在すると指摘できる。たとえば障がい者などの社会的・経済的弱者が、互酬的な関係性をもとに形成される共同体から排除される危険性や、ローカルな共同体でのシティズンシップが重視され、国家レベルでの不正を結果的に容認する姿勢を助長するなどの危険性を孕んだものであるという点である。彼らのシティズンシップが具体的にどのような排除性を孕み、またどのような不利益を引き起こす可能性があるか、それらをどのように捉え、どのような提言ができるのかについてはさらなる考察が必要と言える。